

● 現地視察後の委員からの主なご意見

1. 収蔵庫について	
再度の浸水の可能性を考えると、収蔵庫は危険水位を避けた、上部に移動させる必要があると考えられる。現施設との関係性を考えた場合、 <u>安全な収蔵庫の設置は非常に困難</u> と考える。それを実現するためには、収蔵庫としての性能の確保、収蔵庫と展示空間の動線、収蔵庫への搬入などの検討が必要。	
ミュージアムの収蔵空間をこの建物の改修によって用意することは難しいと思われる。 <u>地下は再被災する可能性あり</u> 、この敷地で浸水高さをこえる高さへの増築も難しい。収蔵庫を別敷地に求めることとなるでしょう。	
収蔵資料もその分非常に多岐にわたり、質・量ともに多い。他に保管できる場所を確保できるかどうか。	
資料が置かれる収蔵庫ならびに展示室を、 <u>再開館時に、危険水位以下に設置することはあり得ないだろう</u> と考える。	
収蔵品を <u>安全に保管できる状況に収蔵庫を設置することが非常に困難</u> である。もしそれをしようとすると <u>莫大な費用</u> がかかる。	
地下にある収蔵庫は、収蔵庫内に留まらず二重壁内にもカビが発生しており、 <u>修繕して文化財を保管できるような環境に戻すことは極めて難しい状況</u> だと思う。	
2. 現施設でのミュージアムの再開館について	
老朽化による雨漏り被害や、今回の洪水被害によるカビの除去なども考えると、 <u>継続的に維持していくことについては慎重な判断が必要</u> だと思う。	
現施設での再開館は困難だと感じた。変えようのない土地が持つ状況（河川が近接している、湧水があるなど。）	
現敷地の現施設において、ミュージアム活動を再開させることは <u>非常に困難</u> であるように思う。	
3. 建物の再利用について	
被災された事実を保存させることを主眼に置いた場合、あえて現施設を残し、その上でミュージアム施設を付加させるようなことは考えられるかもしれない。可能かどうかは別として、極端に言えば、あのような収蔵庫の状況をそのまま保存するような発想…現施設をミュージアムとして残すことには、前回の委員の提案の延長としては、 <u>災害遺構としての意味がある</u> かもしれない。また、建て替えるにしても、現敷地で継続させることで、一部に遺構を残すなど、そのような考えを強化させることも考えられるかもしれない。現施設または現敷地での再開館には、そのような意味は見出せると考えられる。	
構造躯体への大きな問題がなければ、必ずしも建築物として使用できないわけではない。建築物としては、ミュージアム以外の機能により、継続して使用する可能性は考えられるかもしれない。	
ミュージアムとしての存続をあきらめて、 <u>別用途に転用し、建築空間を残すことは意味がある</u> 。転用先用途については、これからよく考えること。建築については、設計当時の意図や計画理念、材料や構造の特徴などから、この建築のオリジナリティをきちんと評価することが必要。	
展示空間として残すのであれば、収蔵庫をどこまで離して可能と考えるか、基本的に展示替えをどの程度おこなうか、収蔵庫建設費用、移送のための費用、専用の移送車購入など、総合的に費用を算出し、ミュージアムまるまる完全移転の費用と比較検討することが必要。	
再開にしても展示をし、人を入れるのは難しいかもしれない。部分的に収蔵・研究専用施設などとして再開する手があるか。	
建物の面積、容積が大きく、手直しにも時間・費用を要する。	

4. 建築物について	
遺構展示空間は、当時の計画提案として、ミュージアムのひとつの典型を示したものとして、今でも教科書的に紹介される中央ホール型の典型例として、設計上の歴史に残る空間であると言える。ミュージアム建築における展示空間のひとつの型として保存されるべきものと思う。 <u>菊竹建築が次々に壊されていく中で、メタボリズム建築を少しでも残す意義はある</u> 。ミュージアムとしての存続をあきらめて、別用途に転用し、建築空間を残すことは意味がある。	
菊竹清訓さんという建築家が設計した建築作品として、 <u>どのように評価を行うかについては、建築の歴史・意匠の専門家に委ねる必要がある</u> と考える。	
5. 構造上の問題、老朽化の問題について	
展示室は、壁面が曲線形になっているために展示用に壁面をあてることが困難であること、常設展示の島展示は展示を固定化させていることなど、 <u>従来から設計的な問題が指摘</u> されている。	
築年数による老朽化や構造上の課題があり、被災前から雨漏りがあるなど、文化財を安心して展示保管できる環境ではなかったことがわかった。	
全体的に細部に及ぶ老朽化が進んでいる。	
老朽化が進んでおり、修繕改修の必要な時期であること、また改修すべき点が多いことは実感した。	
老朽化などによる雨漏りなどの問題が散見された。一方で、建築物を維持するためには、短期的なメンテナンス、長中期的な修繕などが必須であり、それが十分でないようにも思われた。	
その他：全体のあり方に関わること	
市民が <u>そもそもこのミュージアムにどのように愛着をもち、利用しているか</u> 、それは移転しても保てるものか、さらに市民活動が増大するためには、 <u>どのようにしたら良いのか</u> 、考えるべきことは多い。	
単なる修繕ではなく、屋根面の雨水の処理など、大きく施設を改修する計画が必要。大空間のための空調設備なども、現代の環境共生技術を活用すべき改修が必要と感じた。	
今後の博物館をどのように考えるのか、例えば都市型のミュージアムを想定するならばアクセスの良さが求められる。博物館のあり方と照らし合わせることも判断の基準になると思う。	
川崎市の全体の文化行政の考え方の中に、市民ミュージアムの後継として何が必要か、それは単体としての市民ミュージアムではなく、常に他の既存施設や市民活動などとの市内全域のネットワークの中で考えることが重要でしょう。例えば、浸水被害などから「多摩川と市民」を考えるなら多摩川エコミュージアムと協働して役割分担のうえ、二ヶ領せせらぎ館に市民ミュージアムの展示プランチを置くなど。これを機に、「川崎市民」ミュージアムを名乗るなら、市域全体の中で、どのようなテーマのミュージアムを分散させるか、 <u>市民の関わりをつぶさに見て地域全体をミュージアムとして考えていくこと（エコミュージアム）へと意識を向けることが重要</u> 。	